

遠隔画面で語る郷愁

細川 周平

昨年二〇二二年三月、アジア学会 (Association for Asian Studies) ホノルル大会にて、基調講演という大任を任された。依頼してきたのはハワイ大学のクリスティン・ヤノ教授、日本の大衆文化を専門とする文化人類学者で、ハローキティの研究書『ピンクのグロリーバライゼーション』が『なぜ世界中が、ハローキティを愛するのか?』の邦題で翻訳されている。彼女が博士論文『国民の涙を絞る』(一九九五年)という演歌人類学を発表した頃に紹介を受けた。こちらもブラジルのカラオケについて調査中で意気投合し、ホノルルに呼ばれてその話題を話したこともあるし、彼女が日文研ハウスにしばらく滞在したこともある。拙著『遠きにありてつくるもの』(二〇〇八年)の英訳(二〇二〇年)が、日文研の翻訳助成を受けて出版されたのが彼女の目に留まったようで、そこでのブラジル一世の心情分析を、かつて流行歌の感情表現から日本人のノスタルジアを国民としての自己認識として論じたハワイ三世として面白く読んでくれた。オンラインは前提だった。ぼくはコロナ禍と同時に日文研を退官したため(と口実にしているが本性として)ズームが技術的にも心理的にも苦手で、当初、友人の研究室からサポートを受けつつ講演する段取りをつけたが、その後録画と知らされ、恐る恐る自宅から画面に話しかけた。ほぼ初めての経験だった。パソコンに向かって話すのは大舞台の割に妙味に欠けたが、出来上がった映像は話す様子とパワーポイントをうまく編集していたと思う。

『遠きにありてつくるもの』のタイトルは、もちろん室生犀星の「遠きにありておもうもの」をもじっている。「おもう」とは心のなかに「つくる」ことであると再定義し、故郷のそとにあって個人の創作や行動、集団の組織や交際によって、故郷を参照点とする何かを「つくる」行ないを、文学活動や芸能から論じている。感情、情緒、心情などと堅苦しく構えず、日常語の「思い」を理論的に磨くことを出発点とした。英語訳ではロンギング、センチメント、メモリー、アフエクションなどと手際よく訳し分けられている。ポルトガル語ならサウダージに近い。

ヤノの演歌論が『憧れの涙』*Tears of Longing*と題して改訂出版されたことにちなみ、「憧れと所属」“Longing and Belonging”という語呂合わせを思いついたときに、講演の大体の方向は決まった。故郷への憧憬とは故郷への所属を望むこと（つまり想像力のなかでつくること）を意味し、それは故郷をどう解釈するかに応じて変化する。その感覚や意味は他の分野でいうアイデンティティに相当する。そして所属感の移り変わりにつれて、憧憬もまた移り変わる。こんな骨子を日本に限定されないアジアについての研究者全般に伝えようと願った。

ノスタルジアはギリシア語の故郷と痛み（病）を組み合わせた造語で、英語ではホーム・シックネスと訳された。日本語の「郷愁」はドイツ語のハイムヴェーに近い。どちらにも愁いはあっても病いはない（うつ病に至る場合が多いとはいえ）。「思い」の語がうまくあてはまるのは「愁い」の濃い感情だからで、詩歌に乗りやすい理由もそこにある。ある戦前ブラジル移民は戦後三〇年たって「郷愁は生きもの」という思い出記を書いた。日本のことなど考えるものかと強がりを行った友人が、故郷の母親から手紙を受け取ったとたん、恋しさのあまり鬱になってしまったという内容で、郷愁は個人の意志を超えて勝手に動く「生きもの」と決めている。故郷への思いは移民が共同体を維持するのに必要な「義務的な感情」（マルセル・モース）

なのかもしれない。郷愁は甘ったれの気持であると否定する観方に対して、見えない心の絆と見直し、それに結ばれた移民の営みを心情に即して理解することを求めた。その表現素材のひとつが文芸だった。

講演はまず短詩作りが日本語生活では草の根レベルに広がっており、移民社会でも本国と同じ参加型のインフラが素人の創作を支えていることを説明した。特別な人だけが詩に思いを託すのではない。小学卒もいれば六〇代で初めて試した遅咲きもいる。社交的な目的で集まる者も多い。これが新聞投稿や結社を基盤とする短詩文芸の出発点だ。ブラジルでもそれほど変わらない。郷愁は移民文芸のありふれた題材だが、A面の模範的な描き方とB面の押し殺された感情表現のふたつに大別できる。前者の例に、

故郷の立科山に雪積めば兎追ふとて祖父微笑ぬ

帰りゆきてつひに住みつかむ故郷と思ふにあらねただに恋ひこむ

がある。日本のふるさと風景の原点とされる信濃出身で、移住前に『アララギ』に拠った本格派の歌人、岩波菊治（一八九七年～一九五二年）は、こうした故郷への思いをたくさんの歌に託し、歌碑も建てられた。秀才の書きぶりだが、反対にもやもやして屈折した心情も、その場その場の文芸人によってずいぶん書かれている。読んでぐっとくるのはこちらの方だ。たとえば「永住の心へチクチク帰国心」に描かれた未練、「ふるさと引き揚げた国よその国」に描かれた負け惜しみ。「郷愁に腰かけたまま五十年」は自嘲のかたちを採っている。最後には、

異国の土になる運命の手を感じ
あきらめてあきらめきれぬ帰国
郷愁に疲れしつかと抱く異郷

の諦念と納得の境地に至る。移民の心情だけでは話題が狭すぎると思い、九鬼周造の「情緒の系図」に触れた。彼の「いき」や偶然についての論考は、英語の日本思想史でも扱われ、移民研究の外に話題を拡げるのによいと考えた。ヤノが演歌人類学の理論的支えとした見田宗介『近代日本の心情の歴史』の原型に当たる。

講演の後半ではその情緒を引き起こす要因や触媒を話題にした。最も普遍的な要因は距離と時間である。

諦めもつこう地球の内なれば

日本へ一メートル近く葬られ

前者が絶望的な隔たりのなかでの諦めを詠むなら、後者はその感情をユーモアで突き放す。葬儀の際の悲嘆をひっくり返したような奥の気持ちであると思う。公文書には表われない。もうひとつの決定的引き金は老いで、星空を見ながらの思いを詠んだ「郷愁は銀河に流し農に老ゆ」を紹介した。

これら普遍的な要因のほかに、日本食、日本映画、手紙、土産品など折々に郷愁を刺激する個人的な触媒がある。映画本編の始まる前に、松竹の富士山像を見るだけでもう感涙にふけっ

ていたのは、一人二人ではないだろう。日本独自の触媒は軽く触れるだけにし、他国の移住者にも共通する帰化手続きについての連作短歌を詳細に取り上げた。母国から後生大事に抱いてきたパスポートが紙きれとなる儀式と考えたらよい。作者は日系ブラジル婦人界のリーダーだった水本すみ子（一九三二年～二〇一一年）で、講演の題名に選んだ「所属」を非常に鮮明に表している。

くろぐるどと墨塗られゆくわが過去か指紋の流れ鮮明なれど

知らざりし密なるものの剥がさるる痛みに耐えるわれの日本ニッポン

帰化人とう馴染なき名にこだわりつつ歩みゆく町は異邦のごとく

所属の変更は必ずしも心情の居場所の変更を伴わない。母国への法律上の所属が心情の所属とは別に、指紋やパスポートに託されていることを彼女は強く感じた。二重国籍を認めない日本への批判を暗に込めていると政治的に読むことも可能だろう（それを論じるだけでは歌の真意には届かないだろう）。

ここまで具体的な詩歌から論じてきたが、結論ではぐっと抽象的に「故郷（ホーム）の概念は地理的でありかつ実存的である」と切り出した。原著にはないまとめで、人は故郷を去ることとはできて無関係にはなれないという安部公房の満州経験についての総括を踏まえている。両面が合わさってホームは強さの源泉になり、心の最後の安息所にもなる。実存というと哲学用語になってしまうが、生きる存在としての根というような意味で使っている。ホームは民族中心の自己中心の、保守的で排外的でもある。だから外からは批判の対象となりうるが、

同時にありふれた自己の最も私的な、奥の部分を支えている。結論らしく思い切り断定的に語った。

ちょうど講演準備中にデヴィッド・バーンとスパイク・リーの映画『アメリカン・ユートピア』を見て、バーンが四〇年以上前からトーキング・ヘッズを率いつつ、鋭い歌詞でアメリカ社会の喜びと病理を描いてきたことを思い出した。彼とブライアン・イーノの「ホーム」は拙著『遠きにありて：』と同じ二〇〇八年、日系ブラジル移民百年の年のアルバムに入っている。その偶然が気に入って、その歌詞の抜粋を読み上げて講義を終えることにした。ケレンと嗤われるかもしれないが、広い範囲の参加者にホームの概念の大切さ、複雑さを伝えるのにふさわしいと思った。「天は知っている、何が人類を生き生きとさせているのかを／ホーム、なぜいつも帰りつづけるの／ホーム、ぼくの世界がふたつに分かれているところ／ホーム、両親は真実を語っていたのか／ホーム、なんてヘンテコなもの／ホーム、だれもまだ語ったことがない／ホーム、何をやっても引つかかってくる／ぼくらはホーム、とつぜん生き返る」

一行一行深い歌詞を見せながら、みなさんの学問領域でホームの意味深長さに思索を拡げ、本大会のタイトルで提案されている「グローバル・エイジアズ」の時代に、「ホーム・スタディーズ」が可能になればそれに勝る喜びはありません、とお行儀よく結んだ。アジアの人々の遠距離大規模移動は日常化しており、百年以上前、ブラジルで書かれた俳句短歌のある断片は共有されるのではないか。そんな意図がこの歌詞から伝わればいいと思った。

ただし話し終わっても拍手もあいさつもない。誰が聞いていたのかも分からないし、誰からの反応も伝わってこない。あまりにあっけなく気が抜けた。言いつばなしで一時のアイデアは散ってしまった。それ自体は残念だが、オンライン時代の話術・講演術を覚えずに退官できた

タイミングには感謝した。それはマスクごしで話すのと同じようなよそよそしさを感じさせ、旧人類としていくら繰り返ししても身につかないし、幸いそれで許されている。故郷の家族や友と画面を介していつどこでも会話できる時代にどんな郷愁が可能なのか、ホームの意味は変わってしまうのか、この大きなテーマは次世代の学徒に任せたい。

（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所長／国際日本文化研究センター名誉教授）